

後期における魯迅の民衆像に関するノート（上）

关于鲁迅后期的民众观之札记（上）

中井政喜

Masaki NAKAI

1. はじめに
2. 前期における民衆像
3. 後期における民衆像
 - 3.1 マルクス主義文芸理論から見る民衆像（上）（ここまで今号）
 - 3.2 後期における現実の民衆像（中）
 - 3.2.2 後期における特徴的な民衆像（下）
4. さいごに

1. はじめに

この小論の目的は、魯迅（1881～1936）の後期（1928～1936）¹においてその民衆像がどのようなものであったのか、を明らかにすることにある。このために、魯迅の前期（1903～1927）の民衆像の概観を確認し、前期との比較を念頭において後期の民衆像の特徴を追求する。²

2. 前期（1903～1927）における民衆像

先ず、前期における魯迅の民衆像の概観を述べておくことにする。

2.1 前期における民衆像の概観

清朝末期、日本留学時代（1903～1907）において魯迅は、漢民族が異民族の専制支配を受けてきたために、愛と誠実に欠けていると考えた。³そして読書人、指導者層の意識をもった留学生の魯迅から見て、中国の民衆は「素朴な民」（「朴素之民」、「破悪声論」、1908・12・5発表、『集外集拾遺補編』）⁴と愚民の二側面をもつものとして表現された。愚民とは、「精神界の戦士」（「摩羅詩力説」、第九章、1908・2・3発表、『墳』）等を顕彰することと対比的におとしめられる、愚民としての民衆である。⁵「素朴な民」は、誤った指導を与える「志士」（「破悪声論」）と対比的に称揚される純朴な民としての民衆である。それらは、魯迅の指導者意識・士大夫意識から見下ろした民衆の姿の、一枚の銅貨の表裏の関係としてあった。そして目覚めぬ民衆は、「精神界の戦士」等の優れた個性の心声によって目覚める可能性のあるものとされた。⁶ 中国人各人の「人間が確立して」（「文化偏至論」、1908・8発表、『墳』）こそ、社会の目覚めは近くなるとした。

1911年の辛亥革命によって清朝が打倒されたのち、袁世凱の権力掌握とともに中華民国の共和制はまもなく改革の実質が失われ、辛亥革命は挫折していった。辛亥革命挫折の経過と結果のなかで魯迅は絶望を深め、沈黙に陥っていく。そして中華民国の現状を改革するために、思想革命（精神革命）が当面の重要課題と考えていったと思われる。とりわけ単なる政治権力の交代よりも、中華民国の理想の実現のために、国民性の改革（思想革命）が先ず根本的に重要とされた。⁷

1918年以降再開される魯迅の文学・思想活動のなかで、中国の民衆は、「素朴な民」と国民性の悪を具現する愚民（「阿Q正伝」の阿Q、「長明灯」の民衆等）との二側面として表現された。魯迅は挫折した改革者の「個人的無治主義」（『魯迅景宋通信集』二四、1925・5・30）の憤激の感情（シェヴィリョフ的心情）をもって麻痺した目覚めぬ民衆（愚民）を表現した。他方、魯迅はまた中国旧社会という、「主犯なき無意識のこの殺人集団」（「我之節烈観」、1918・7、筆名唐俟、『新青年』第5巻第2号、1918・8・15）のなかで、抑圧される弱者幼者（「素朴な民」）の運命に「人道主義」に基づく深い

同情を注いだ。⁸ またその後1924年、中国旧社会のなかで「素朴な民」（「祝福」〈1924・2・7〉の祥林嫂）の遭遇する悲惨な境涯が描かれた。⁹

辛亥革命挫折以後から1925年ころまで、魯迅の民衆像は、基本的に、『人道主義』と『個人的無治主義』の起伏消長（『魯迅景宋通信集』二四、前出）の一環として存在したと思われる。すなわち「人道主義」の立場から見る「素朴な民」と、「個人的無治主義」¹⁰の立場から見る目覚めぬ麻痺した民衆としての愚民である。

2.2 「個人的無治主義」から見る民衆像の一端

ここで、「個人的無治主義」（シェヴィリヨフ的心情の側面）から見る民衆像の一端を、「復讐」（1924・12・20、『野草』）、「長明灯」（1925・2・28、『彷徨』）を取りあげて見ることにする。

「復讐」（1924・12・20、『野草』）について、魯迅は後年の書簡で次のように言及した。

「私はかつて《野草》のなかで次のようなことを書いたことがあります。ひとりの男とひとりの女が刀を持って広野に対峙する。そこで退屈な人々が競って出かけ、必ずや事件が起こって、退屈を紛らわすことができると思う。しかし二人はその後まったく動かず、退屈な人々は依然退屈のまま、老死するにいたる。題して『復讐』としたのも、この意味からです。しかしこれも憤激の談にすぎません。」（1934年5月16日付け、鄭振鐸宛て書簡、『魯迅全集』第13巻）

退屈な群衆・民衆は、退屈を紛らわすことであるならば、たとえそれが刀をもつ一對の男女の対峙であれ、改革者の処刑であれ、群れ集ってきた。退屈な群衆・民衆に対して、一對の男女は自らも干からびつつ、刀をもって対峙を持続させる。そのことによって群衆・民衆はいっそう退屈になり、退屈のままに老衰死する。そのことに、対峙する一對の男女の復讐の意味があった。この退屈な群衆・民衆は、挫折を体験した改革者のもつ憎悪の視角から見る群衆・民衆像であると思われる。この復讐の在り方は、旧社会全体に対しての、とりわけ麻痺して目覚めない、ただ自らの退屈を紛らわそうとする

群衆・民衆に対する、挫折体験をした改革者のもつ憎悪に充ちた復讐の心情（シェヴィリョフ的な「憤激」の心情、その自虐的な表現）、深い批判の心情を投影すると思われる。

「長明灯〔常夜灯の意〕」（1925・2・28、『彷徨』）は、旧社会の迷信ぶかい伝統的な慣習の支配する郷村吉光屯で、社廟の灯明の火を消そうとする改革者とそれを守ろうとする民衆の相剋を描く。村人の莊七光は言う。

「『火を吹き消してしまったら、我々の吉光屯はどういう吉光屯になるのか、これで駄目になってしまう。老人はみな言っている、この火はつまるところ梁の武帝がつけなされたもので、ずっと続いて、消えたことがない、と。長毛の叛乱のときでさえ消えたことがなかった……』」

村民は祖先伝来の慣習・風習である灯明をひたすら守ろうとする。火が消えれば、この村は海に変化し、村人はドジョウになると言い伝えられている。改革する者は村の何かを変えるために、今できることとして、社廟の灯明の火を消そうとする。改革する者は村民に阻まれるが、しかし社廟に「火をつける」という手段があると言った。村には緊張が走った。

「『ほんとうに、いまましいことだ。』」

かつい
閻亭は頭をもたげた、

『去年、連各莊では一人殴り殺した、こんな子孫を。みんなが同時同刻に一斉に手を下したので、一番初めに殴ったのは誰か分からない、と口を合わせて断言したら、あとでは何のおとがめもなかった。』」

心配する村人は有力者を交えて相談し、社廟に「火をつける」と言うこの激烈な改革者を、社廟のなかの座敷牢に閉じこめた。彼の叔父は村人との相談のなかで、彼の財産を奪う算段もした。

1925年の女師大事件の渦中において、魯迅は許広平に次のように言う。

「しかし私から見ると、良くない結果を防ぐ必要があります。それは、いたずらに多くの犠牲を費やしても、かえってずるい人間が得をする機会となることで、これも中国では常にあることです。しかし学生のほうとしては、これらを心配することはできないので、ただ良心に従って行くしかありません。しかしゆっくり、ねばり強くやらねばなりません、性急に激烈にやっ

けません。中国の青年のなかには、『性急』すぎる欠点がかなりあり(小鬼はその一人)、そのため長く辛抱するのが難しく(はじめ激烈すぎるから、すぐ精力を使い果たしてしまいやすい)、また簡単に行き詰まって、損をして痼癢を起こします。)(『魯迅景宋通信集』二九、1925・6・13)

「長明灯」(前出)で魯迅は、旧社会における目覚めぬ麻痺した吉光屯の村民たちのなかで、性急で激烈な改革者の行動が悲劇を生んだことについて、哀惜と懸念を伝えている。語り手魯迅の改革者に対する哀惜は、改革者を圧殺する、麻痺し目覚めない伝統的旧社会の全体(民衆・支配層等の構成する旧社会全体)に対する憎悪とともに存在した。すなわち性急で激烈な改革者に対する哀惜と懸念は、旧社会全体に対する憎悪と表裏をなす魯迅の心情であったと思われる。

2.3 国民性批判のなかで

2.3.1 国民性批判のなかの民衆

また魯迅は、中国改革のために根本的な課題とする思想革命(精神革命)において、改革されるべき国民性の悪について次のように言及する。

「中国国民性の墮落は、決して家のことを気にかけるためではありません。彼らは〈家〉のために考慮したことはないと思います。最大の病根は目のつけどころが近く、さらに〈卑怯〉と〈貪欲〉なことです。しかしこれは長い間に培ったもので、一時には取りのぞくことが難しいです。私はこれらの病根を攻撃する仕事について、もしもするべきことがあれば、現在も手放そうとは思いません。しかしたとえ効果があるとしても、恐らく大変遅いので、自分では見ることができません。)(『魯迅景宋通信集』一〇、1925・4・8)

ここで魯迅は、中国国民性の墮落を指摘し、その病根を目先の事に目をつけることと、「卑怯」「貪欲」をあげる。また、次のように魯迅は中国人が現実を正視しようとしぬ精神を述べる。

「中国人のさまざまな方面を直視する勇気のないことは、隠すのと騙すことを用いるもので、奇妙な逃げ道を作りだして、自らは正しい道だと思こむ。この道にあることが、国民性の怯懦きようだ、懶惰らんだと、そして狡猾であることを物語

る。』(「論争了眼看」、1925・7・22、『墳』)¹¹

この国民性の悪を民衆の階層において具現したものが、魯迅における愚民像の一部であると思われる。

2.3.2 旧社会の構造のなかの国民性について

1925年ころ、魯迅の考えた旧社会の構造は、封建的な身分的階層社会において、上から下へ抑圧の下降が行われ、苦しめる者と苦しめられる者が連珠のように連なる社会であった。魯迅は最下層の弱者・幼者に人道主義的な同情を寄せた。魯迅は「灯下漫筆」(1925・4・29、『墳』)で次のように言う。「私たち自身はとっくにきちんと配置している。貴賤があり、大小があり、上下がある。自分は人に虐げられるが、しかしまたほかの人を虐げることができる。自分は人に食われるが、しかしほかの人を食うこともできる。一段一段と掣肘^{せいちゆう}して、身動きすることができない。また身動きしたいとも思わなくなっている。なぜならばもしもちょっと動けば、利益はあるかもしれないが、しかし弊害もある。私たちはひとまず古人の優秀な方法と行為^{つか}をしてみる。『天に十日有り、人に十等有り、下の上に事える所以は、上の神に共する所以なり。故に王は公を臣とし、公は大夫を臣とし、大夫は士を臣とし、士は早^{そう}を臣とし、早は輿を臣とし、輿は隸を臣とし、隸は僚を臣とし、僚は僕を臣とし、僕は台を臣とす。』(《左伝》昭公七年)

しかし『台』に臣がないのは、あまりにも苦しいのではないか。心配する必要はない。彼よりもっと卑しい妻、もっと弱い子どもがいる。』(「灯下漫筆」)

「このような連鎖は、各々そのところを得ていて、敢えて非難するものがあれば、その罪名は分に安んぜずと言う。」(同上)

「このことから私たちの眼前で、なおさまざまな饗宴を自分の目で見ることができる。あぶり肉があり、フカヒレの宴席があり、日常の食があり、洋食がある。しかし茅葺きのもとに粗末な食事もあり、道ばたに残り物のつゆもあり、野には餓死者がある。あぶり肉を食う身代金をあがなえないほどの金持ちがおり、また飢えて死に瀕する一斤につき八文の子どもがいる(『現代評

論』第21期を見よ)。いわゆる中国の文明とは実際、金持ちの食事ために人肉の饗宴を手配りするにすぎない。いわゆる中国とは、実際この人肉の饗宴を手配りする台所にすぎない。」(同上)

「この文明は、外国人を陶酔させたばかりではなく、またつとに中国のあらゆる人々を陶酔させずにはおかず、しかも笑いを浮かべさせるほどである。というのも古代から伝来し、今にいたるまで存続する多くの差別は、人々をそれぞれに分断し、ついに再びほかの人の苦しみを感ずることをできなくさせたからである。そして自分がそれぞれほかの人を奴隷として使い、ほかの人を食う希望をもっていることにより、自分にも奴隷として使われ食われる将来が同じようであることを忘却する。そこで大小無数の人肉の饗宴は、文明が存在して以来現在にいたるまでならべられ、人々はこの会場で人を食い、食われ、凶暴な者の愚昧な歓呼によって、弱者の悲惨な叫び声を覆い隠した。女性や子どものことはさらに言うまでもない。

この人肉の饗宴は現在もならべてあり、多くの人にならべ続けたいと考えている。これらの人を食う者を一掃し、この宴席をすっかりかたづけ、この台所を打ち壊すことが、すなわち現在の青年の使命である。」(同上)

これが1925年当時、魯迅の見る旧社会の姿、構造である。中国の伝統的旧社会は、上層から下層にいたるまで階層化されており、差別と分断によって、人は他人の苦痛を理解することができない。そのため、人は一段上層の者に苦しめられると同時に、一段下層の者を苦しめるという存在になる。一段上層の者からは奴隷としてあつかわれ、一段下層の者に対しては奴隷としてあつかう。このような存在が連珠のように連なるものであった。それは国民性の悪(奴隷根性、卑怯)に基づく、抑圧の下降する連鎖の制度であると思われたい。

こうした旧社会構造のなかに、魯迅は「春末閑談」(1925・4・22、『墳』)で、支配者(金持ち)と被支配者を取りあげ次のように言う

「私たちの造物主——もしも天に本当にこのような『主人』がいるものとなれば——を恨めしくなる。一つは『支配者』と『被支配者』を永遠にはっきりと区別しなかったことを恨む。二つには支配者に腰ほそ蜂のような針をも

たせなかったことを恨む。三つには、思想中枢を蓄えている頭を切りとつても、なお動く——服役する——ことができるように被支配者を造らなかつたことを恨む。三つのうち一つを得ることができれば、金持ちの地位は永久に堅固であり、統制支配も永久に気力を節約でき、そのため天下は太平である。」（「春末閑談」）

上の「春末閑談」の考え方は、封建的な身分階層制の抑圧の下降する連鎖のなかにおいて、大まかに支配層（金持ち）と被支配層に二分される社会構造の考え方を示唆している。

1926年ころにおいて、「一点比喩」（1926・1・25、『華蓋集続編』）は、この「苦しめる者」と「苦しめられる者」の連鎖のなかで、搾取する強権の上層と、救われようもなく搾取される下層の二層に分離している状態として旧社会を描きだす。魯迅は、ここでは、中国旧社会を山荒らしと棘のない「山荒らし」で構成される社会に喩える。

「たとえこのように叫んでも〔“Keep your distance!”を指す〕¹²、おそらく山荒らしと山荒らしの間で効力がありうるだけだろう。なぜなら彼らがお互いに距離を保つのは、その理由が痛いことにあり、叫ぶことにはないからである。もしも山荒らしのなかに別なもの、棘のないものが交じっていれば、どのように叫んでも、彼らはやはり体を押しつけてくる。孔子は、礼は庶人に下らず、と言う。現在の状況から見ると、庶人が山荒らしに近づいてはならないのではなく、山荒らしは勝手に庶人を刺して暖を取ることができるべきである。負傷することは当然負傷しなければならない。しかしこれも自分だけに棘がないことを責めなければならず、適当な距離を彼に守らせるには足りない。孔子はまた言う、刑は大夫に上らず、と。これではまた、人々が紳士になろうとするのも無理はない。

これら山荒らしは、もちろん牙、角や棍棒で防ぐことができる。しかし少なくとも山荒らし社会の定める罪名、〈下流〉あるいは〈無礼〉という罪名を、必死に背負わなければならない。」（「一点比喩」、1926・1・25、『華蓋集続編』）

中国旧社会は、金持ち・紳士階層（山荒らし）が民衆（棘のないもの）を

できるかぎり搾取することのできる社会であり、それに抵抗すれば〈下流〉等の罪名を背負わなければならない。旧社会は、金持ち・紳士の支配層がほしいままに庶民を食物にする社会であるとする。こうした社会構造についての分析の仕方は、基本的に1925年の社会構造の考え方を踏襲しつつ、この1926年ころにはなお、より明確に、支配層（金持ち・紳士階層）と被支配層（民衆）を分離し、その抑圧と被抑圧の關係に、また抑圧者を擁護する中国旧社会の諸關係（「礼は庶人に下らず、刑は大夫に上らず」、『礼記』「曲礼上」）に焦点を当てて明瞭に述べている。

2.3.3 目覚めぬ民衆のおかれた条件

他方、1925年ころに魯迅は、民衆が中国旧社会という大石の抑圧のもとで生活してきたという事実を指摘した。ここに、これまでの弱者幼者に対する同情のほかに、はじめて魯迅に、目覚めぬ麻痺した民衆を弁護する言葉が現れる。「俄文訳本『阿Q正伝』序及著者自叙伝略」（1925・5・26、『集外集』）は次のように言う。

「現在私たちが聞くことのできるのは、数人の聖人の徒の意見や道理で、それらは彼ら自身のためのものである。庶民については、むしろ黙々と育ち、やつれ黄色くなり、枯れ死にする、まるで大石の下の草のように。こうしてすでに四千年となる。」（「俄文訳本『阿Q正伝』序及著者自叙伝略」）

この文章で魯迅は、中国人がそれぞれ高い塀によって切り離され、互いの精神を通わせることができず、互いの精神的苦痛を感ずることができない状況であるとする。と同時に、この旧社会のなかで、民衆がどうしてそのような状態にあるのかについて、大石の下に抑圧され、沈黙のなかに枯れ死にする状況、歴史的社会的に形成されてきた状況を、比喩的に述べて説明する。これは、大石の下に抑圧されてきた民衆に対する弁護の言葉であると思われる。

また、「学界的三魂」（1926・1・24、『華蓋集続編』）において、歴史上の農民の一揆は農民革命軍の蜂起とされた。

「すこし大きく国事に喩えてみよう。太平の盛世には、匪賊が存在しない。群盗がいたるところに発生するとき、旧史を見ると、必ず外戚、宦官、奸臣、

小人が国政をつかさどっている。たとえ官話を大いにたぐってみても、その結果はやはり、『ああ、悲しいかな』の言葉である。この『ああ、悲しいかな』の前に、民衆〔小民、原文〕はたいてい相連れだつて盗賊となる。だから私は源増先生の話、『表面上、土匪や強盗にすぎないと見えるが、実際は農民革命軍である。』（《国民新報副刊》四三）ことを信ずる。それでは社会は進歩したのか。決してそうではない。（中略）農民は政権を奪取しようとしな
ない。源増先生はまた、『四、五人の熱心なものが皇帝を押し倒して、自ら皇帝中毒に浸っていくのにまかせておく』、と言う。（「学界的三魂」）

魯迅はここで、旧史に基づいて、世の中が混乱したときに、農民は盗賊になると言う。魯迅は、それが實際上、皇帝の支配を打倒する農民革命軍であるとする源増の意見に、賛意を示す。ただ、農民は自らの権力を打ち立てることをせず、新しい皇帝が出現するにまかせるとする。ここからすれば、魯迅は、皇帝の支配を覆す原動力としての農民の力を認め、農民の反抗・闘争の力量を認めている。それは「卑怯」「貪欲」の発露ではなく、奴隷根性の発露ではない。1925年26年ころの魯迅は、民衆を目覚めぬ愚民として指弾し、また最下層の弱者・幼者に同情するとともに、大石の抑圧という歴史的社会的状況におかれてきた民衆、歴史上において農民革命軍として蜂起した民衆に対して、新しい認識と弁護の姿勢を見せるようになったと言える。

2.3.4 女師大事件、三・一八惨案をへて

女師大事件は、1924年末ころから公に表面化した。北京女子師範大学校長楊蔭榆よういんゆは家長としての権力をもって学校運営を行おうとし、女師大学生側と対立した。その後、校長は自治会役員を退学処分とし、そのことから校長側と学生側との対立闘争は、北京の教育界を巻きこんだ闘争、新旧思想の闘争となった。北洋軍閥政府の教育総長章士釗しょうししやう、北京大学教授陳西滢等ちんせいえいが校長の後ろ盾となり、学生側に立った魯迅等と対立して、熾烈な論争と闘争が展開された。魯迅にとって、女師大事件は北洋軍閥政府の政治権力との具体的な闘争であった。この闘争は、1925年末に、女師大学生側の勝利となった。

翌1926年3月18日、北洋軍閥政府は、日本政府の干渉に反対する徒手空

拳の請願デモ隊に発砲し、暴行を加えて弾圧し、死者47名、負傷者200数名を出し、三・一八惨案(残虐な事案)を引きおこした。前述のように辛亥革命挫折以後、魯迅は国民性の改革(思想革命)を中国変革の根本的な主要な課題と位置づけてきた。しかしこの事件を契機に、魯迅は北洋軍閥政府の圧制の打倒、すなわち権力構造の変革が、中国変革の課題の緩急の観点において、いっそう緊要で優先すべき課題であることの認識をもった。1926年三・一八惨案以降、魯迅は、北洋軍閥政府という政治権力を打倒することを、中国変革の当面優先すべき最重要課題であると認識し、その結果、国民性の改革(思想革命)の課題は後景に退いた。また、1926年の当時は、まさしく国民革命の高揚の時期にあった。シェヴィリヨフ的な旧社会全体に対する復讐の心情は、政治権力としての軍閥政府打倒という明確な目標をもつことに代わり、それが「個人的無治主義」に対する克服につながっていく一因となったと思われる。¹³

1926年、「個人的無治主義」を脱却しつつあった魯迅は、『朝花夕拾』(北京未名社、1928・9)所収のいくつかの作品(例えば、「阿長と『山海経』」、1926・3・10)において、「『人道主義』と『個人的無治主義』の起伏消長」(前出)の一環として存在してきた、これまでの民衆像の枠組みを超えるような、すなわち「朴素の民」と愚民の枠組みを超える、あるがままの故郷紹興の民衆像を回顧し描きだした。¹⁴

2.3.5 四・一二反共クーデターののち上海へ

魯迅は、1926年8月、北洋軍閥政府の圧力を避けるため、北京を去り厦門大学に赴任した。そこには休養という目的もあった。しかし1927年1月、再び現実社会の闘争に参加するために、厦門大学から広州の中山大学に移って全学の教務主任等を勤める。

国民革命が進展すると見える中で、1927年4月12日、国民革命軍総司令蒋介石が上海で四・一二反共クーデターを起こし、4月15日には、広州でも左翼関係者、共産党に対する弾圧がはじまる。蒋介石等の国民党右派は4月18日に南京国民政府を樹立させ、1927年7月、武漢国民政府が崩壊して、国民

革命は挫折した。広東において、クーデターで殺害された左翼関係者は2100余名、中山大学の学生も40余名逮捕された。魯迅は中山大学学生の逮捕に抗議し、4月21日、中山大学の一切の職務を辞し、¹⁵ 自宅に引きこもった蟄居状態になる。魯迅は、広州における反共クーデターのなかで、左翼青年を殺害する者が同じ青年であることを目にし、そのため魯迅は青年一般に対する、進化論に基づく無条件の信頼、畏敬の気持ちを失った。進化論を中国改革の構想に組み入れた、中国改革の展望は破綻した。しかし魯迅は自然科学としての進化論を否定したわけではなかった。¹⁶ 魯迅は、1927年10月、蟄居に近い状態にあった広州から、比較的安全な上海の租界に近い地区に逃れた。

上海に移って以降もなく、1928年1月から、魯迅は、「無産階級革命文学」を主張する中国革命文学派の激しい批判を浴びる。¹⁷ 魯迅はそれに反駁して革命文学論争がはじまる。この論争を契機として、魯迅は社会科学とマルクス主義文芸理論を本格的に習得し受容していくことになる。¹⁸ これ以降において、魯迅はやがて、社会科学およびマルクス主義文芸理論に基づいた中国旧社会の社会分析を行い、中国変革の展望をもつことができるようになっていった。また民衆像を、史的唯物論に基づき、当時の中国旧社会を歴史的社会的関係の中で探究していくことになった。小論はこの1928年1月の時点の後期の始まりとする。

3. 後期における民衆像

後期において魯迅は、具体的にどのような位置づけのもとに民衆を描きだし、またどのような姿として中国民衆を描きだしたのであろうか。前期の民衆像の経過を念頭に置きながら、この課題を進める。

3.1 マルクス主義文芸理論から見る民衆像

魯迅は、1928年から、社会科学およびマルクス主義文芸理論と本格的に接触し受容していくことをつうじて、その民衆像において様々な点で変化がうかがわれるようになると思われる。

3.1.1 国民性の位置づけについて

プレハーノフ(1857~1918)¹⁹は、国民性をどのようにとらえるべきかという問題について、「論芸術〔芸術について〕」(『芸術論』、蒲力汗諾夫、魯迅訳、光華書局、1930・7、1929・10・12訳了、『芸術論』、プレハーノフ原著、外村史郎訳、叢文閣、1928・6・18、魯迅入手年月日、1928・11・7)で次のように指摘する。

「スタール夫人の意見によれば、国民性は歴史的条件の所産であるということに注意することだ。しかし国民性は、若しもそれが与えられた国民の精神的特質のなかに現れたものとしての人間の本性でないとしたら、何であるか？

そして若しも所与の国民の本性がその歴史的発展によって創造されるならば、それがこの発展の第一動因であり得ないことは明らかである。がここからは文学——国民的精神的本性の反映——はこの本性がそれによって創造される歴史的条件そのものの所産であるということが出て来る。それは人間の本性ではなく、与えられた民族の性質ではなく、彼の歴史および彼の社会的構造が彼の文学を説明することを意味する。この観点からスタール夫人はフランスの文学を観察してもいるのである。彼女によって十七世紀のフランス文学に献げられた一章は、この文学の主たる性質を当時のフランスの社会・政治関係と、その帝王権に対する関係のなかに観察されるフランスの貴族階級の心理とによって説明しようとした、極めて興味ある試みである。」(『芸術論』、61頁)

「あらゆる与えられた民族の芸術は彼の心理によって規定される、彼の心理は彼の状態によって創造される、が彼の状態は究極において彼の生産力と彼の生産関係によって条件づけられる、と。」(『芸術論』)²⁰

プレハーノフは、国民性が第一動因ではなく、歴史的諸条件の所産であり、歴史的発展によって作りだされるものであるとする。文学を説明するのは、或る国民の本性ではなく、また民族の性質ではなく、歴史的諸条件と社会的構造である。文学は、歴史的諸条件と社会的構造によって生みだされた国民の本性と民族の性質の反映であると説明される。²¹

前述の魯迅の中期（1918～1927）における文学活動のなかで、1926年三・一八惨案の以前、魯迅は国民性の改革を中国変革(或いは社会改革)の主要な課題として言及した。国民性はそれ自体があたかも第一動因とされ、その改革は根本的課題と考えられて、啓蒙の目標とされた。そののち、1926年三・一八惨案以降、中国変革の課題における緩急の観点に基づき、国民性の改革の課題は後景に退き、北洋軍閥政府支配の圧制の打倒或いはそれに対する抵抗・反抗が、中国変革の当面の最大の優先的課題として魯迅によって位置づけられたと思われる（魯迅の抵抗・反抗は、1927年4月四・一二反共クーデター以降において、蒋介石による新たな支配体制、南京国民政府の圧制に対する抵抗・反抗となる）。

そして1929年10月ころ、魯迅が翻訳したプレハーノフの見解によれば、或る時期或る社会に国民性自体が存在するとしても、しかしその国民性は第一動因ではなく、歴史的諸条件と社会的構造の所産として説明されている。

1926年三・一八惨案以降、魯迅はなお国民性の改革を中国変革の最も根本的課題（あたかも第一動因として）としながらも、²² この三・一八惨案の体験に基づいて、すなわち中国変革の課題における緩急の観点に基づいて、軍閥支配体制の打倒を優先する選択をした。しかし1929年10月に訳了した、ここでのプレハーノフの見解は、国民性に関する史的唯物論の解釈に基づく見解である。すなわち魯迅は1929年ころはじめて、史的唯物論による国民性に関する基本的解釈を習得し、国民性をあたかも第一動因であるかのように認識することはなくなったと言える。

魯迅は1933年のころ、「経験」（1933・6・12、『南腔北調集』）で次のように言う。

「多くの人の経験をとおした後に、むしろ後人に悪い影響を与えたものもある。たとえばことわざに言う、『各人は門前の雪を自ら掃い、他家の瓦の霜に関わるなかれ』というのがその一つである。急場を助け負傷者を救って、いささか注意を怠れば、これまで人に誣告されて罪に陥りやすかった。悪い経験による結果の歌もある、『役所の門は広く開いているが、道理があっても金がなければ入るなよ』、そこで人々は事が自分に関わらないのでさえあれば、

遠く離れて立って身ざれいにする。私が思うに、人々は社会において、最初は決してこのようにすこしも互に関心をもたないものではなかった。しかし極悪非道なものが権力を握り、このゆえに事実において多くの犠牲者が出て、のちには自然とみなこの道を歩くようになった。だから、中国においては、とりわけ都市において、もしも路上に急病で地に倒れたり、車がひっくり返り振り落とされて負傷した人がいるとすれば、道行く人は囲んで見ているか或いは面白がる人さえいるが、手を差し伸べて助ける人はむしろきわめて少ない。これがすなわち犠牲によって引き換えてえた悪いところである。」魯迅は上のように、中国人が他人の窮地に関心をよせず手を差しのべない気質が、すなわち中国人の現在の悪い習性、悪い一つの国民性が、中国の歴史的諸条件と社会的構造のもとに作られてきたものであることを指摘する。

こののち魯迅は、民衆の階層において出現する国民性を問題としてとりあげる場合においても、この新たな位置づけのもとで取りあげたと思われる。

3.1.2 階級の認識と新興の無産階級

魯迅は中期(1918~1927)において、旧社会の封建的な身分階層制のもとに上から下へと抑圧を下降させる連珠のように連なる社会構造に注目した。また魯迅は、封建的旧社会における身分階層制の理解を維持しつつ、1926年ころ、おおまかに支配層(金持ち・紳士階層)と被支配層(民衆)の二層に分離する構造があるものとして理解するようになっていた。

後期において魯迅は、マルクス主義文芸理論の受容をとおして、階級社会の構造を明確に認識したと思われる。1928年ころ以降、マルクス主義文芸理論を習得しつつ、魯迅はまた社会科学に基づいて旧社会の構造を階級社会として分析し理解したものと言える。そして、中国の半植民地半封建社会の現状において、魯迅はなお封建的な身分階層制が、或いはそれに属する差別と分断による統治の形態が、場所によって依然として存在することも認識していたと思われる。²³

また、魯迅は、人間の性格感情等が階級性を帯びることについて、「文学的階級性」(1928・8・10、『三閑集』)で次のように言う。

「私自身は、次のように思っています。もしも性格感情等が、すべて〈経済に支配〉される（経済組織に根柢をもつ或いは経済組織に依存する、とも言うことができます）という説によるならば、これらは必ずみな階級性を帯びます。しかし『みな帯びる』のであって、『ただそれだけがある』のではありません。」（「文学的階級性」）

1928年半ば以降、ここで魯迅は、人の性格感情等が必ず階級性を帯びること、しかし階級性だけを帯びるのではないことを指摘した。作家が階級社会における人物の形象を忠実に描写して、文学に表現するとすれば、その文学において描写される人物の形象は、その対象の人物にもともと存在する階級性が描写され表現されたものとなるとする。

1930年、魯迅は「〈硬訳〉与〈文学的階級性〉」（『萌芽月刊』第1巻第3期、1930・3、『二心集』）を書いた。ここで魯迅はプロレタリア文学論（原文、「無産者文学理論」）に基づいて、梁実秋の議論に対して逐一詳細に反論を行っている。

「文学は人間を借りずに、『性』^{しょう}を表しようがない。ひとたび人間を用いれば、しかも人間はなお階級社会に存在するので、決して所属する階級性を免れることができない。『束縛』を加える必要はなく、実は必然による。もちろん、『喜怒哀楽は、人の情なり』である。しかし貧乏人には決して取引所を開いて元手を割る悩みがないし、石油王は石炭ガラを拾う北京の老婆の苦しみを知るはずもない。」（「〈硬訳〉与〈文学的階級性〉」）

魯迅によれば、文学が「基本的人間性を表現する」場合、それは人間を描くことをつうじて表現される。人間は階級社会に生活するので、その所属する階級性を帯びることを免れることができない。そうした階級性は、無産者文学理論が外から文学に付け加えるものではなく、本来、階級社会に生活する人間それ自体に備わっているものである。

こうした魯迅の議論からすれば、1930年ころ、魯迅が史的唯物論による社会像（経済を基本的土台として階級によって構成される社会、それが歴史的に発展してきた）に対する理解をもっていたことが推測される。魯迅は、中国民衆を中国の階級社会のなかにおいて階級性を帯びるものとして理解し、

位置づけることとなった。

また魯迅は、1932年『『二心集』序言』(1932・4・30)と1934年「答国際文学社問」(『国際文学』1934年第3、4期合刊、『且介亭雜文』)でそれぞれ次のように言う。

「私はいつも自分のことを言っていた。どのように『壁にぶつかって』いるのか、どのようにカタツムリになっているのかと。まるで全世界の苦悩が一身に集まって、大衆のために苦しい目を受けているかのようであった。これもまさしく中産の知識階級分子の悪い癖である。ただもともとこの熟知する階級を憎悪して、いささかもその潰滅を惜しまなかった。後にまた事実の教訓によって、新興の無産階級だけに将来があると考えたのは、確かである。」(『『二心集』序言』)

「以前、旧社会の腐敗は、私は感じていました。私は新しい社会の興ことを希望しましたが、しかしこの〈新しい〉ものがどのようなべきかわかりませんでした。しかも〈新しい〉ものが興った後、必ず良いものであるかどうか、もわかりませんでした。十月革命後になって、私は〈新しい〉社会の創造者が無産階級であることを知りました。しかし資本主義各国の反宣伝のために、十月革命にはなおいささか冷淡であり、しかも懐疑をもっていました。現在ソ連の存在と成功は、階級のない社会が必ずや出現するだろう、と確かに信じさせてくれました。完全に私の懐疑を取り払っただけでなく、勇気を多く増してくれました。」(「答国際文学社問」)

上述の「事実の教訓〔事実的教訓、原文〕」(『『二心集』序言』、1932・4・30)とは、おそらく1917年10月、ロシア革命において労働者農民が立ちあがり建国したのちの、1930年ころ、社会主義をめざす過渡期にあったソ連の存在と、第一次五ヵ年計画(1928～1932)の経済的成功等の諸事実を指すと思われる。²⁴ 魯迅は、新興の無産階級(労働者階級)に期待をよせて、将来において階級のない社会が必ずや出現することを信ずると言う。

3.1.3 資本主義社会のなかの民衆

魯迅は、プレハーノフの『芸術論』の翻訳につけた『『芸術論』訳本序』

(1930・5・8、『二心集』)で次のように言う。

「マルクスの名前は、ロシアではとくに知られていた。『資本論』第1巻も他国よりも早く訳本があった。多くの『人民の意志派〔民意党、原文』の人々は、彼と個人的に知りあい、通信していた。しかし彼らがきわめて尊敬したマルクスの思想は、彼らにおいては純粹の〈理論〉であって、ロシアの現実とは合わず、ロシア人とは別に関係がないものと思っていた。なぜならロシアには資本主義がなく、ロシアの社会主義は工場から発生するのではなく、農村から出るだろうとしたためである。しかしプレハーノフはペテルブルクにおける労働運動を回顧した際、農村に関する疑惑を生じ、原書からマルクス主義の文献に精通して、またこの疑惑を強めた。彼はそこで当時のあらゆる統計的材料を捜し集め、真のマルクス主義の方法で、それを研究し、ついに資本主義がロシアに実際君臨していることを確信した。1884年、彼は『われわれの意見の相違〔我們的対立、原文』という本を発表した。それはナロードニキ〔民衆主義、原文〕の誤りを指摘し、マルクス主義の正当性を証明した名作である。彼はこの本のなかで、大衆としての農民は、現在、社会主義の支柱となることができないと指摘した。ロシアで、そのとき都市の工業が発展しつつあり、資本主義制度がすでに形成された。必然的にこれによって立ちあがる者は、資本主義の敵である、すなわち資本主義を絶滅させる無産者である。それゆえロシアにおいても西欧と同じく、無産者が政治的改造に対して最も意味のある階級である。その境遇から言って、組織をもった断固とした革命において、他の階級に較べていっそう大きな才能があり、しかも将来のロシア革命の射撃兵としても、最も適切な階級である。」(260頁-261頁)

「1889年、社会主義者が第一次国際会議をパリで開き、プレハーノフが会議で、『ロシアの革命運動は、ただ労働者の運動によってだけ勝利することができる、これ以外に解決の道はない』と述べたとき、歐洲の有名な多くの社会主義者たちでさえも、まったくこの話に反対であった。しかしまもなく彼の業績は現れた。文章の面では、『歴史上の一元的観察の発展』(或いは『史的一元論』と略称する)があつて、1895年に出版され、哲学的分野から、ナ

ロードニキと闘争し、唯物論を擁護した。マルクス主義の全時代、ここに教えを受け、これによって戦闘的唯物論の根本を理解した。(中略)翌年、事実の方面において、彼の弟子たちとナロードニキの闘争の結果、ついに紡績工場の労働者三万人の大同盟ストライキをペテルブルクで勃発させ、ロシアの歴史に新時期を画した。ロシアの無産階級の革命的価値は、はじめてみんなに認識され、そのときロンドンで開いていた社会主義者の第4次国際会議も、これに対して驚嘆し、歓迎した。」(261頁-262頁)

このようなプレハーノフとロシア革命の歴史は、魯迅に次のような中国の事実を想起させ、中国の労働者階級に対する認識を新たにさせるような作用があったと推測できる。中国において、1925年五・三〇運動で大規模な反帝国主義の同盟ストライキが上海を中心に全国で行われ、また1927年3月、上海で労働者のゼネストによって、一時、労働者階級が上海市の政治権力を把握した等々の歴史上の事実が存在する。こうした中国の事実と、社会主義をめざすソ連の存在等を踏まえれば、魯迅が、理論上において、中国の変革の道筋において、労働者階級に期待を抱くことはあり得ることと思われる。

『『二心集』序言』(1932・4・30)で「事実の教訓〔事実に基づく教訓、原文〕に基づいて「新興の無産階級だけに将来がある」とされた「新興の無産階級」とは、労働者階級を指していると思われる。²⁵

魯迅は、「写于深夜里」(1936・4・4、『且介亭雜文末編』)でケーテ・コルヴィッツの版画集に触れ次のように言う。

「外国に行ったことのない人は往々にして、白人とはみな人にキリストの道理を説いたり、或いは商社を開いたりする者で、立派な衣服を着て美食をし、面白くなければ、すぐに革靴で人を蹴りつけると思いこんでいる。この画集があれば、世界には実際に多くのところに〈侮辱され損なわれた〉人が存在しており、これらの人は私たちと同じ気持ちの友人であって、しかもこれらの人たちの悲哀のために、叫び戦う芸術家もいることがわかる。」(「写于深夜里」)

魯迅は、ケーテ・コルヴィッツの版画集をとおして、欧米の白人社会にも、すなわち欧米の先進国社会、資本主義社会にも、「侮辱され損なわれた」下

層の民衆、労働者農民が存在することを指摘する。魯迅は、各国の社会を階級社会ととらえ、そこに「侮辱され損なわれた」人々、被抑圧階級、被搾取階級の存在を見ている。そして時には、被抑圧階級の民衆は、圧制に対して抵抗し、反抗して戦う。また、彼らの悲哀のために叫び戦う芸術家もいるとする。

魯迅は右の図について、『凱綏・珂勒恵支版画選集』序目（1936・1・28、『且介亭雜文末編』）で次のように言う。

「(14)『反抗』(Losbruch)。同上の第5幅、原寸51×50cm。誰もが草原で必死で前に向かい、先頭は青年であり、命令するのは一人の女性で、その全体から復讐の憤怒があふれている。彼女は全身が力であり、手を振り足を踏み、見れば勇敢に前に進む勇気を生じさせるだけでなく、天上の雲も声に応じて片々に裂けたようだ。彼女の姿態は、あらゆる名画のなかで最も力量のある女性の一人である。『職工一揆』のなかと同じように、女性はいつも非常の事態に参加して、しかもきわめて力があり、これも『丈夫の気概をもった女性』の精神である。」

以上のような歴史的諸条件と社会的構造の所産としての国民性に関する位置づけ、そして階級社会において階級性を帯びる民衆像、変革の力量として期待される労働者階級等は、魯迅が主としてマルクス主義文芸理論から中国の現実を踏まえつつ学んだ民衆像だと思われる。



「反抗」(1903年 農民戦争)、『凱綏・珂勒恵支版画選集』、三閑書屋、1936(『魯迅編印画集輯存(1)』、上海人民美術出版社、1982・7)

注

¹ 小論は魯迅の文学活動を、前期(1903~1927)と後期(1928~1936)と区分する。そして必要な場合、前期をさらに、初期(1903~1917)、中期(1918~1927)と分けけて論ずる。

² 私が目をととした小論の主題に関する論文等、参考とした文献等は次のものにとどまる。以下適宜に、小論のなかで具体的に言及することにする。

〔中国語参考文献〕

- ① 「歴史唯物主義的光輝思想」、倪墨炎、『魯迅後期思想研究』、人民文学出版社、1984・8
- ② 「魯迅後期的群衆觀」、哈九增、『上海大学学报（社会科学版）』1990第1期
- ③ 「魯迅対馬克思主義批評傳統的選択」、艾晓明、『中国左翼文学思潮探源』、湖南文艺出版社、1991・7
- ④ 「适合自己的文体——魯迅雜文論」、錢理群、北京大学出版社、1999・11
- ⑤ 「魯迅の民衆觀」、尹康莊、『魯迅研究月刊』2001年第4期、2001・4・20
- ⑥ 「第十四講 “其中有着時代的眉目”」、錢理群、『魯迅作品十五講』、北京大学出版社、2003・9
- ⑦ 「析魯迅之民衆觀」、梁競男、『天中学刊』第20卷第6期、2005・12
- ⑧ 「第五講 魯迅雜文的言說環境、方式与命運」、錢理群、『魯迅九講』、福建教育出版社、2007・1
- ⑨ 『詩学与政治：魯迅晚期雜文研究（1933-1936）』、郝慶軍、文化芸術出版社、2007・2

〔日本語参考文献〕

- ① 『中国現代政治史』、池田誠、法律文化社、1962・10・1、底本は1972・10・20第5刷
 - ② 『中国の発見——長い歩み』、ポーヴォワール著、内山敏、大岡信託、紀伊國屋書店、1966・9・30
 - ③ 『ロシア・ソ連を知る事典』、平凡社、1994・4・25、初版第5刷（増補版）
 - ④ 『中国国民革命——戦間期東アジアの地殻変動』、栃木利夫・坂野良吉、法政大学出版局、1997・12・18
 - ⑤ 『中国国民革命政治過程の研究』、坂野良吉、校倉書房、2004・3・15
- 3 東京の弘文学院在学当時の魯迅について、許寿裳は「回憶魯迅」（『我所認識的魯迅』、人民文学出版社、1952・6）で次のように語る。

「いつも私達は三つの関連する問題について語っていた。(1) どのようであってこそ理想的人間性であるのか。(2) 中国民族のなかで最も欠けているものは何なのか。(3) その病根はどこにあるのか。」

「(2) の対しての追求において、中国民族に最も欠けているものは誠実と愛である、と当時私達は思った。言い換えれば、偽って恥を知らず、互いに猜疑して損ないあうという欠点に深く犯されている。スローガンはいつも聞いて響きが良く、標語や宣言はいつも立派である。本にはひたすら堂々たることを述べ、飾りたててある。しかし実際から言うと、全く別のことである。」（同上）

「(3) の問題については、当然歴史に追求の手を伸ばさねばならない。原因は多いけれども、二度異民族に奴隷とされたことが、最大最深の病根であると考えた。奴隷となった人間に、誠実を説き愛を説き得るようないかなる余地があろうか。……唯一の救済方法は革命である。」（同上）

漢民族の民族性の欠陥を癒して具足したものとさせること、すなわち精神的改革について常に語り合い、その手段は革命であるとした、とする。

- 4 魯迅は「破惡声論」（前掲）で次のように言う。

「もしも素朴な民で、その心が純白であれば、労働して一年を終えるとき、必ずやその精神を高揚させることを求めるであろう。」

「中国とはどのような国なのだろうか。民は農耕を楽しみ、故郷を去ることを軽蔑し、上にある者が功をたてることを好めば、在野のものはこれを恨んだ。およそ自ら誇るところは、文明の光輝盛大なこと、暴力によることなく四夷に抜きんで、世界に稀なほど平和を熱愛したことである。ただ安楽さが長期にわたり、防衛の力が次第にゆるんだところへ、虎狼が突然やってきたため、民は塗炭の苦しみに陥った。しかしこれは我が民の罪ではない。流血を憎み、殺人を憎み、別離に耐えず、労働に喜んで従事する。中国人の性格はこのようであった。」

魯迅の著作については、『魯迅全集』全18巻（人民文学出版社、2005・11、2005年版と略称する）を使用する。以下同じ。

⁵ 魯迅は「文化偏至論」（1908・8発表、『墳』）で次のように言う。

「もしも誠に今日のために計画を立てるとすれば、必ず為すべきことは、過去を考察し、将来を推測し、物質を攻撃して精神の光を盛んとし、個人を尊重して多数を排することである。人間の内容が輝き盛んとなれば、国家も興起する。どうして枝葉にとらわれ、いたずらに経済軍事、国会立憲のこののみを言っているのか。」

「善悪の判断は大衆と同調してはならない。同調すれば、不誠実な結果を招く。政治は大衆に同調してはならない。同調すれば、立派な政治をもたせない。ただ超人が出現してのみ、世の中は太平となる。もしも出現しえないのなら、期待は英哲にかかる。」

⁶ 魯迅は「破悪声論」（前掲）で次のように言う。

「現在尊崇され期待されるのは次のようなことである。大衆の喧噪たる議論に付和せず、独り自己の見識を抱いた士が、深く洞察し、文明を評定する。惑い痴れた者と善悪の判断を同じくせず、正しいと信ずる所へ赴く。世を挙げて称賛されても調子に乗らず、世を挙げて非難されてもひるまない。従う者があれば来るに任せ、たとえ嘲罵を浴びて世の中に孤立しても、びくともしない。このような士が存在することである。そうならば、天の光で奥深い暗黒を照らしだし、中国人の内なる輝きを發揮させる。こうして、人はそれぞれ己を持ち、波風に漂わないことが期待できるし、中国も自立するであろう。」

⁷ 1925年、魯迅は国民性の改革について『魯迅景宋通信集』八、1925・3・31、『魯迅景宋通信集』、湖南人民出版社、1984・6）で次のように言う。

「最初の革命は排満で、やり遂げるのが容易なことでした。その次の改革は、国民に自分の悪い根性を改革するよう求めることで、そこで国民は聞き入れなくなったのです。だからこの後最も大切なのは、国民性を改革することです。さもなければ、専制であろうと、共和であろうと、何であろうとも、看板は変わったけれども、品物は元のとおりというのではまったくだめです。」

魯迅は、「通説（一）」（1925・3・12、『華蓋集』）で次のように言う。

「私は、現在の方法は最初にやはり何年前か《新青年》ですでに主張された『思想革命』を用いなければならないと思う。いまだにこの話であるとは悲しむべきことかも知れないが、しかしこれ以外にほかの方法はない、と私は思う。しかも『思想革命』の戦士を準備するのは、なお現在の社会とは関係がない。戦士が養成されるのを待って、そこでもう一度勝負を決めるのです。」

⁸ 「個人的無治主義」と「人道主義」について、魯迅は『魯迅景宋通信集』二四（1925・5・30）で次のように言う。

「実際のところ、私の考えは元々分かりにくいのです。というのもそのなかにはもともと多くの矛盾があるからです。私をして言わしむれば、『人道主義』と『個人的無治主義』という二つの思想の起伏消長であるのかも知れません。ですから私は突然人々を愛し、突然人々を憎みます。仕事をする場合、ときには確かに他人のためですが、ときには自分のなぐさめのためで、ときには生命のすみやかに消滅することを願うがゆえに、わざと命をかけてやるのです。」

「個人的無治主義」については、「魯迅の〈個人的無治主義〉に関する一見解——附 江坂哲也訳〈『革命物語』序〉(アンドレ・ピラート著)」（『言語文化論集』第10巻第1号、名古屋大学総合言語センター、1988・10・30、のちに『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第5章として所収）で論じたことがある。

⁹ 「祝福」(1924・2・7、『彷徨』)について、「魯迅『祝福』についてのノート(1)(2)——魯迅の民衆観から見る」(『南腔北調論集』、山田敬三先生古稀記念論集刊行会編、東方書店、2007・7、『野草』第79号、中国文芸研究会編、2007・2・1、のちに(1)(2)を合わせて、『魯迅後期試探』〈名古屋外国語大学出版会、2016・10・20〉の第1章として所収)で論じたことがある。

¹⁰ 魯迅の「個人的無治主義」には、「魯迅の〈個人的無治主義〉に関する一見解——附 江坂哲也訳〈『革命物語』序〉(アンドレ・ピラート著)」（前出）で述べたように、二側面があると思われる。それは、無政府的厭世的「個人主義」と「虚無的」「個人主義」の二側面である。ここでは、前者の、改革の挫折体験をへて、シェヴィリョフ的憤激の心情をもつ無政府的厭世的「個人主義」を指すものとして使用する。

¹¹ 魯迅はまた、「通訊(二)」（1925・3・29、『華蓋集』）で次のように言う。
「先生のお手紙は言っております。惰性が現れる形式は一つではない。最も普通なのは、第一は命を天に任せること、第二は中庸である、と。私は、この二つの態度の根本は恐らく、惰性だけですますことはできないであろう、実は卑怯なのだと考えています。強者に会えば反抗する勇気もなく、『中庸』ということに誤魔化し、わずかな慰めとする。それゆえ中国人がもしも権力をもち、他人が彼をどうしようもないと知り、あるいは『多数』が彼の護符となるときがあれば、多くは強暴残忍で、あたかも暴君であって、事を決するのに決して『中庸』ではない。口を開けば『中庸』になってみると、それは勢力をすでに失い、とくに『中庸』でなければいけなくなったときです。(中略)これらの現象は実際、中国人を廃滅させようのもので、外敵があらうと、なかろうと。もしもこれらを救い正そうとすれば、さまざまな劣った点を先行して暴露し、その立派な仮面を引き裂くよりしかたがない。」

魯迅は、中国の民族滅亡をまぢかな危機として意識し、この危機を脱するために、伝統的国民性の悪の代表的な一つである奴隷根性を、そしてその背後にある卑怯な精神を改めなければならないことを説いている。この時期においては、伝統的国民性の悪があたかも民族滅亡の第一動因であるとして論じられている。

¹² [] のなかは、中井の補注である。以下同じ。

¹³ どのように「個人的無治主義」を脱却したのかについて、「魯迅の〈個人的無治主義〉に関する一見解——附 江坂哲也訳〈『革命物語』序〉(アンドレ・ピラート著)」（『言語文化論集』第10巻第1号、名古屋大学総合言語センター、1988・10・30、特に注30、のち

に『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第5章として所収、特に注31)のなかで若干論じたことがある。その点について、大まかなまとめとして次のように述べた。

「シェヴィリョフ的側面については、中国変革の当面する最大の敵が軍閥とその権力構造にあることを理解し(女師大事件、三・一八惨案の体験によって)、全社会に対する無差別の憤激の心情に換わって、社会矛盾の核心としての標的(軍閥)の存在を認識することをつうじて、克服した。また、変形したサーニンの側面(「虚無的」「個人主義」)については、上述のように中国変革に資する自らの価値を正当に位置づけ直し、自己の生存権を肯定することをつうじて、すなわち自らの幸福の追求が中国変革への努力と必ずしも対立・矛盾するものではないことを明瞭に自覚することをつうじて、克服していった。」(196頁)

また、前述の、旧社会構造における被支配層として抑圧される民衆、農民革命を起こしうる民衆を理解していったことも、旧社会全体に対する無差別の憎悪を克服する一因であったと思われる。

¹⁴ 1926年ころの民衆像について、「1926年27年における魯迅の民衆像と知識人像についてのノート(上)(中)(下)」(『名古屋外国語大学外国語学部 紀要』第39号、40号、41号、2010・8・1、2011・2・1、2011・8・1、のちに『魯迅後期試探』〈名古屋外国語大学出版会、2016・10・20〉の第4章として所収)で論じたことがある。

¹⁵ 『魯迅年譜(増訂本)』第2巻(李何林主編、人民文学出版社、2000・9増訂版)による。

¹⁶ 1927年四・一二反共クーデター後、魯迅の進化論の変化について、「魯迅の『進化論から階級論へ』についての覚え書き(上)(下)」(『名古屋外国語大学外国語学部 紀要』第42号、43号、2012・2・1、2012・8・1、のちに『魯迅後期試探』〈名古屋外国語大学出版会、2016・10・20〉の第5章として所収)で論じたことがある。

¹⁷ 『魯迅と革命文学』(丸山昇、紀伊國屋書店、1972・1・31)は次のように指摘する。「国共合作が崩壊し、国民革命が挫折した時点での中国の思想・文化界は、国民革命の歴史をどうとらえるか、中国革命の主体はどこにあり、それは何の力に依拠して再び確立されるか、そこでインテリゲンチアはいかにあるべきか、何をなし得るか、といった問題の前にあらためて立たされたのであり、1920年代末から30年代にかけての諸問題は、ほとんどすべてこの問題をめぐって展開して行ったのであって、『革命文学論戦』もその文学界における表われにほかならなかった。」

¹⁸ 後年魯迅は次のように言う。

「私には創造社に感謝しなければならないことがある。それは彼らが私に幾種かの科学的文芸論を読むように『強要し』、先の文学史家たちが山ほど説明して、なお混乱してすっきりしない疑問を理解するようにさせたことである。このことからさらにはプレハーノフの『芸術論』を翻訳することとなり、私の——私のためにさらに他人にまで及んだ——ただ進化論のみを信ずるという偏りを補い正してくれた。」(『三閑集』序言、1932・4・24、『三閑集』)

革命文学論争を通して、魯迅は本格的にマルクス主義文芸理論と接触していくことになる。

魯迅が1928年頃以降に翻訳した、主なマルクス主義文芸理論の文献には次のものがある。訳了の日付順に、以下にならべる。

- ①『文芸政策』(魯迅訳、「蘇俄的文芸政策」、『奔流』第1巻第1期〈1928・6・20〉から『奔流』第2巻第5期〈1929・12・20〉まで掲載、『露国共産党の文芸政策』、蔵原惟人・外村史郎訳、南宋書院、1927・11、魯迅入手年月日、1928・2・27、のちに『文芸政策』(水沫書店、1930・6、付録の内容を変えて、1930・4・12訳了))
- ②『現代新興文学の諸問題〔無産階級文学の諸問題、原文』(上海大江書舗、1929・4、1929・2訳了、『文学評論』(片上伸、新潮社、1926・11・5、魯迅入手年月日1927・11・7)所収)
- ③『壁下訳叢』(上海北新書局、1929・4・20、後半部分にマルクス主義文芸理論にかかわる論考が収められる)
- ④『芸術論』(盧那卡爾斯基、上海大江書舗、1929・6、1929・4・22訳了、『マルクス主義芸術論』、ルナチャルスキー原著、昇曙夢訳、白揚社、1928、魯迅入手年月日、1928・9・3)
- ⑤『論文集《二十年間》第三版序』(蒲力汗諾夫、1929・6・19訳、『芸術論』、光華書局、1930・7、『論文集《二十年間》第三版序』、プレハーノフ原著、『階級社会の芸術』、蔵原惟人訳、叢文閣、1928・10・1、魯迅入手年月日、1928・10・10)
- ⑥『文芸と批評』(盧那卡爾斯基、上海水沫書店、1929・10、1929・8・16訳了)
- ⑦『芸術論』(蒲力汗諾夫、魯迅訳、光華書局、1930・7、1929・10・12訳了、『芸術論』、プレハーノフ原著、外村史郎訳、叢文閣、1928・6・18、魯迅入手年月日、1928・11・7)
- ¹⁹魯迅は、『芸術論』訳本序』(1930・5・8、『二心集])で次のように論じ、プレハーノフを高く評価する。

「プレハーノフはまたマルクス主義芸術理論に基礎をすえた。彼の芸術論は厳然とした一つの体系をなしていないけれども、方法と成果を含むその残された著作は、後人の研究の対象となるばかりではない。それはマルクス主義芸術理論、社会学的美学を打ちたてた古典の文献と称するに恥じない。」

「第一篇の『論芸術』はまず『芸術とは何か』という問題を提起し、トルストイの定義を補正して、芸術の特質を、感情と思想の具体的形象的表現であると断定する。そこで進んで芸術も社会現象であることを表明し、そのため観察するときにも、史的唯物論の立場を用いる必要があるとする。これとは相反する史的観念論(St. Simon, Comte, Hegel)に批判を加え、またこれらとは相対する、生物の美的趣味に関するダーウィンの唯物論的見解を紹介する。」

- ²⁰日本語原文は、魯迅の使用した底本『芸術論』(プレハーノフ原著、外村史郎訳、叢文閣、1928・6・18)による。

日本語の底本から引用する場合、仮名遣いは現代仮名遣いに、旧字体は新字体に、それぞれ改め、送り仮名はそのままとし、ルビ・傍点は省略する。以下同じ。

- ²¹国民性に対する史的唯物論によるプレハーノフの論について、「魯迅対馬克思主義批評傳統的選択」(『中国左翼文学思潮探源』、艾晓明、湖南文芸出版社、1991・7)が指摘している。
- ²²魯迅は、1926年三・一八惨案以前において、想定される中国変革の過程で武力の必要性を軽んじていたわけではない。「『魯迅景宋通信集』一〇」(1925・4・8、『魯迅景宋通信集』、前掲)で魯迅は次のように言う。

「改革が最も早いのは、やはり火と剣です。孫中山が一生奔走して、なお中国がこのようなのは、その最大の理由は彼に党軍がなかったことにあり、このために武力をもつ他人と妥協せざるをえなかったのです。(中略)最大の病根〔国民性を指す〕は、目先にとらわれ、そのうえ〈卑怯〉と〈貪婪〉であることです。しかしこれは長い間に作られたもので、しばらく取り除くのが容易ではありません。」

魯迅は、辛亥革命挫折以後、1926年三・一八惨案以前において、国民性の改革を最重要課題とし(あたかも第一動因として)、軍閥支配体制の打倒はその進展とともに提起される課題として考えたと思われる。

- ²³ 魯迅は「沙」(1933・8・15、『南腔北調集』)において次のように言う。魯迅は、民衆が必ずしも散沙でないとする。民衆は自身の利害にかかわるとき、実際に行動して、請願し蜂起し謀反したとする。そして現在でも民衆の請願の類が存在する。

「それでは、中国には沙はないのだろうか。あることはある、しかし民衆〔小民、原文〕ではなく大小の支配者である。

人々はまたよく次のように言う、『昇官発財〔出世と金儲け〕』と。実はこの二つは並列されるものではない。昇官しようとする理由は、ただ発財しようとするためであり、昇官は発財の道にすぎない。だから官僚は朝廷に依存しながらも、決して朝廷に忠ではない。吏役は役所に依存しながらも、決して役所を大切にしない。頭領が清廉の命令を出すと、手下は決して従うことがない。対処の方法には『蒙蔽〔欺くこと〕』がある。彼らはすべて私利私欲の沙であり、己を肥やすことができるときには肥やす。しかもどの一粒も皇帝であり、帝を称することができるころでは帝を称する。或る人々はロシア皇帝を『沙皇〔ツァー〕』と呼ぶが、これをこのやからに送れば、きわめてふさわしい尊号である。財はどこから来るのか。民衆の身から削ぎおとすものである。民衆が団結しうるなら、金儲けは面倒なことになる。それで、当然できるだけ方法を考えて、彼らを散沙に変化させなければならぬ。沙皇によって民衆を治める、そこで全中国は『一皿の散沙』となった。」(「沙」)

1933年において、魯迅は中国の民衆は必ずしも散沙ではなく、民衆は自身の利害のために請願し、蜂起し、謀反した。しかし散沙のような大小の沙皇(支配者層)によって民衆が巧妙に分断して統治され、搾取されている。その結果、全中国(民衆を含めて)が散沙の状況を呈しているとする。魯迅は、中国の大小の支配者層による巧妙な分断統治を指摘する。ここには、支配層によって分断統治される支配状況がうかがわれ、その大小の「沙皇」の存在によって分断支配される形態は、1930年代にも存在した封建的な身分的階層社会に属する一様相であると思われる。

- ²⁴ 魯迅は「林克多『蘇聯聞見録』序」(1932・4・20、『南腔北調集』)において、ソ連の現状を次のように理解していた。

「作者〔林克多〕は普通の人であり、文章は普通の文章である。その見たり聞いたりしたソ連は、ありふれたところであり、その人民はありふれた人物であり、そこに設けられたものはまさしく人情に合致し、生活も人間らしくなったにすぎない。(中略)

しかもここから、世界の資本主義文明国がどうしてもソ連に侵攻しようとする原因を理解することができる。労働者農民が人間らしくなったことは、資本家と地主にとって極めて不利であり、そのためどうしてもまず労働者農民の模範を殲滅しようとする。ソ

連が普通であればあるほど、彼らはますます恐れる。」

「妻の共有、父殺し、裸体デモ等の『普通でないこと』が確かに存在しないばかりでなく、むしろ多くの極めて普通の事実がある。それは『宗教、家庭、財産、祖国、礼教……一切の神聖不可侵』のものが、すべて糞のように投げすてられ、真新しい、真に空前の社会制度が地獄の底から湧きでてきて、数億の大衆が自分で自分の運命を支配する人になったことである。」

「この本が言うソ連の良いところを私が信ずるのには、またひとつの原因がある。それは十年ほど前、ソ連がどんなに駄目でどんなに望みがなにかを言った、いわゆる文明国の人々が、去年ソ連の石油と小麦の前で震えあがったことである。しかも私は確かな事実を見ている、文明国の人々は中国の膏血を吸い、中国の土地を奪い、中国の人民を殺している。彼らはベテニ師である。彼らはソ連を悪いと言い、ソ連を侵攻しようとする。そのことからソ連が良いものであることがわかる。」

ソ連の社会は、労働者農民に人間らしい生活をさせることができ、石油と小麦を輸出できるほどに生産力を成長させた。それはまさしく、ロシア旧社会で虐げられ悲惨な境遇にあった労働者農民という被抑圧階級が、人間らしい生活を送ることができるようになったこと、そのような社会が実現しつつあることを意味した。

『蘇聯聞見録』（林克多、1932・4・20）については、拙著『魯迅後期試探』（名古屋外国語大学出版会、2016・10・20）の第10章「『蘇聯聞見録』について」で紹介したことがある。

²⁵ 馮雪峰は、『回憶魯迅』（人民文学出版社、1952・8、底本は、『魯迅卷』第8編〈中国現代文学社編〉）で、1929年に魯迅が階級が存在について、1927年4月12日の反共クーデターを振りかえりながら、次のように述べたことを伝える。

「『階級闘争は、人が承認しなくても良い。事実の教訓〔事實的教訓、原文〕は必ず理論の宣伝より有力です。』

『階級闘争は、確かに人を驚かせ寝食を不安にさせるでしょう。しかし誰がまず階級闘争を実行するのか。口先で宣伝する人ではなく、口には言わず、世の中に階級闘争があることを承認しない人です。革命者ではなくて、手に刀をもった反革命者です。』

ここでの「事実の教訓」は、1927年の4・12反共クーデターと思われる。このことから魯迅が事実に基づいて、理論を検証していたことが分かる。